

『私たちの救いと神の主権』

'20/11/01

聖書箇所: マルコの福音書 4 章 21-34 節 (新約 p.71-)

前回(2週間前)、私たちは、マルコ伝 4 章の前半から、「4種類の土地に蒔かれたみことば」に関する例え話を学びました。“同じようなみことばの種”が蒔かれたにも関わらず、一体どうして、ある所では、たくさんの実を結んだのに、別のある所では、生長が途中で止まったりとか、また、別のある所では、全く芽を出すことさえ無かった…、なんていう“違い”が出てきてしまうのでしょうか？

命題: 私たち人間の救いは、どのような要素で構成されているのでしょうか？

感謝なことにイエス様が、マルコ 4:13 以降で、その例え話についての、解き明かしをしてくださっているのです、もちろん、私たちは、その解き明かしの部分についても学びましたけれども、…でも、実は、イエス様の解き明かしは、前回に学んだマルコ 4:20 で終わってしまっているわけではありません。

今日、私たちは、すぐその後で、イエス様が続けて教えてくださった…、私たち人間の救いに関する「要素」なんて言うと、すごく難しいのですが…、「一体、私たちの救いには、どういったものが関わっているのか？」ということについて、ご一緒に学んでいきたいと思えます。願わくは、このみことばを学ぶことによって、私たちが、ますます、みこころに沿って生きていくことができ…、その神様からの恵みに感謝することができるようになっていくことを期待いたします。どうぞ、まずは、今日のみことばであるマルコ 4:21-34 をお聞きくださいますでしょうか？

I・クリスチャンに与えられた責任！(21-23 節)

今日もまた、与えられた聖書のみことばを少しずつ観察していきたいと思えます。まずは、今回のみことばの内、マルコ 4:21-23 をご覧ください。ここから、イエス様は、私たちクリスチャンに与えられた“責任”と言うか、「クリスチャンの使命」というべきものについて教えてくださっています。そこには、こう記されてあります。

21 また言われた。「あかりを持って来るのは、柀の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。」

22 隠れているのは、必ず現れるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるためです。

23 聞く耳のある者は聞きなさい。」

●この話の文脈と、話を聞いていた対象

ここ 21 節の最初をご覧くださいと、『また言われた…』という言葉で始まっています。…ということは、私たちが今日学ぼうとしているみことばは、前回、私たちが学んだみことばの続きだということが分かります。実際、この平行記事であるルカ 8 章では、イエス様が、4種類の土地に関する解き明かしをくださった、そのすぐ後、何の休憩(≒間)も入れず、イエス様は、続けて、「あかりを燭台の上に置く…」という話をしてくださったように、ルカは書き記してくれています。

…ということから何が分かるのか？と言いますと、イエス様がこの話をされた対象は、恐らくは、4種類の土地に関する解き明かしを聞いていた、あの12弟子たちと、ごく少数の熱心な弟子たちであっただろうと思われま。

イエス様は、その者たちに、ここ 21 節以降のみことばをお話しになられたのだと思われま。それは、“明かり”に関することでした。「普通、明かりは、升の下やベッドの下には置かないでしょ？そうではなくて、燭台の上に置いて、その明かりを活用しようとするじゃないですか！」まあ、そういう内容です…。

イエス様は、ちょうど、これと同じような話を、あの「山上の説教」でも話しておられます。そこには、こう記されてあります。マタイ 5:14-16、『14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。15 また、あかりをつけて、それを柀の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。』

⇒ね！今日のみことばと、そっくりでしょ？…ここで、イエス様は、天に国籍を持った者たち…、言わば、クリスチャンたちに向けて、この話をしてくださっています、「あなた方は、地の塩であり、世の光である！」って…。だから、私たちクリスチャンは、この世の中にあって、出て行かないといけなしい…、また、神様が、私たちのことを用いようとして、そのように仕向けくださるのです。…と言いますのは、そうすることによって、世の人たちが、私たちの内に持っている信仰を見るからです！…だから、私たちは、教会の中でだけ、くすぶってはいけません！そうでしょ？

●神は、クリスチャンたちを用いようとしてくださっている！

では、もう少し具体的に言うと、私たちは、どのようにして福音を…、救いのメッセージを宣べ伝えていくべきなのでしょう？ローマ 10:14 のみことばは、こう教えてくれています。『しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。』って…。イエス様のことを信じた私たちクリスチャンが宣べ伝えなくて、一体、誰が、このイエス様のことを…、救いのメッセージを宣べ伝えることができるのでしょうか？…天の神様は、私たちが、このイエス様のことを宣べ伝えていくよう、願っておられるのです。

今日のみことばの 22 節で、『隠れているのは、必ず現れるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるため…』とあるのは、神様が、私たちの信仰を明らかにされることを期待しておられるからです。実は、つい先程引用した、マタイ 5 章のみことばは、そういうことについて教えてくれています。『このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。』って…。つまり、私たちクリスチャンは、言葉によって、この福音のメッセージを伝えていくことはもちろん、私たちの神の御性質を現わした行ないによっても、私たちの主であられるイエス様を伝えていかなくてはならないのです！…実際、世の人たちが見ておられるのは、私たちの言葉以上に、私たちが、どのように生きているか？本当に、魅力ある人生を送っているか？本当に、希望を持って生きているかどうか？ということでしょう？…だから、ペテロも、『…あなたがたのうちに希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしないなさい。』(I ペテロ 3:15)ということをお教えるわけですから。…そのように、私たちに、救いのメッセージを、言葉だけでなく、行ないにおいても、その生き方においても、証していく！という務めが与えられているのです…。

II・聞いた者たちが、なすべき選択！(24-25 節)

そして、その次に教えられているのは、そういうみことばを聞いた者たちがなすべき“選択”であります。前回のみことばでも学んだ通り、みことばの種を聞いた者たちには、その、聞いたみことばに対する責任と言うか、選択があるのです。今日のみことばの内、24-25 節には、こう記されてあります。

24 また彼らに言われた。「聞いていることによく注意しなさい。あなたがたは、人に量ってあげるその量りで、自分にも量り与えられ、さらにその上に増し加えられます。」

25 持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っているものまでも取り上げられてしまいます。」

● 聞いたみことばに対する責任

ここ 24 節でも、『また彼らに言われた…』とありますので、イエス様の話を聞いていた対象者は、基本的に変わっていません。しかし、ここ 24 節では、『聞いていることによく注意しなさい！』とあって、彼らが“聞く”ことに関して、よくよく注意すべきことに焦点が当てられています。イエス様が、このみことばを話される少し前、イエス様は、『道ばた』と称された者たちについて、こう説明してくださいました。15 節、『みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。』って…。このように、せっかく、みことばを聞いたとしても、そのみことばに関心を持たないと、そのみことばさえ、奪われてしまうという話です。

ここだけではありません。イエス様は、マタイ 25 章、世の終わりと云うか、裁きに関する教えの中で、こう話してくださいました。マタイ 25:26-30 にこうあります、『26 とところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ざりするのです。』って…。

皆さんは、この話の流れをよーくご存じだと思います。ここで、イエス様は、救われている者たちと救われていない者たちとの違いを説明するに当たって、5タラントを預かったしもべ、2タラントを預かったしもべ、1タラントを預かったしもべの話がされました。…明らかに、この1タラントを預かったというしもべは、救われていないしもべでありました。…その者に対して、神様を表わしている、そのご主人様は、最後、こうおっしゃるわけです、『だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられる…』って…。そして、1タラントを預かっていたしもべは、その1タラントさえも取り上げられて、その1タラントは、10タラントを持っているしもべに与えられてしまうわけです。

いかがです？…ちょうど、私たちが2週間前に学んだこともそうでしたけれども、神様のみこころや恵みというものは、皆、すべての者たちに等しく…、均一に分け与えられるものではありません！そうでしょ？…天の神様は、私たちが神様のことを愛して、その神様のみこころを行なおうとする者にこそ、より、多くのみこころを示してくださいませけれども…、その逆に、神様のみこころを行なおうとしない者たちに対しては、みこころを明らかにされなればかりか、みこころを隠そうとされます。実際、そういう話を、私たちは、前回のみことばからも学んだはずであります。

…と言いますのは、彼ら(=当時のユダヤ人)たちが、真剣に、神様のみこころを聞こうとしていなかったからです。皆さん、覚えてくださっています？マタイ 13 章の『彼らの…、目はつぶっているからである。』というくだり…。そのように、あの当時のユダヤ人たちは、自分たちの都合の悪いことには、目をつぶって…、神様のみこころと言うか、せっかく、神様が示してくださっている真理に対して、真剣に向き合おうとはしなかったのです。だから、イエス様は、「彼らには、天の御国の奥義を知ることが許されていません！」とおっしゃられたのです。

● 赦されない罪？

どうぞ、皆さん。私たちが少し前に学んだみことばである、マルコ 3:28-29 をご覧くださいませ？『28 まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。29 しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。』

⇒その時にも言いましたが、このみことばは、難解(=解釈が難しい)であるとされています。ここで、イエス様は、「人は、どんな罪だって、赦していただけます。」ということをおっしゃっています。…ここで、少し話がそれますが、私は、こういったみことばがあることから、もし万が一、クリスチャンが自殺などをして、その人は救いを失うことが無い！と理解しています。…だって、「どんな罪だって赦していただける」わけでしょ？…実は、「自殺をしたら救われぬ…」なんていう教えは、聖書のどこにも教えられていないし、多分、そういった教えはカトリックから来ているのです。ただ、もし、その人が本当に救われているのなら、その人は神様のみこころを1番にしようとするがゆえに、まず、自殺なんていう選択をしないはずですよ…。それは、皆さんと一緒にです。

さて、ここで、イエス様は、「しかし、聖霊をけがす者だけは、永遠に赦されることが出来ず、とこしえの罪に定められます」という趣旨の非常に厳しいことを教えてくださいました。でも、皆さんは、よーくご存じのはずです。人を救うのは、私たち人間ではなく、“神様の御業”のはずですよ？…それなのに、私たち人間の犯した罪や選択で、私たちが救われ得ないなんていうことが有り得るのでしょうか？…だって、もし私たちの犯す罪や選択で救われたり、救われなかったりするのだとしたら…、救いというのは、「100%神様の御業」ではなく、私たちの側の選択や責任でもあると言い得るのではないでしょか？

正直、救いに関して、この聖書のみことばが教えてくれていることは、かなり複雑で…、例えば、三位一体の教理などと同じく、私たち人間には、完全には理解し得ないことだろうと、私は考えています…。しかし、聖書が教えてくれていることを、私たちは、聖書が教えてくれている範囲内で、できるだけ、正しく理解していきたいと思っています。…確かに、私たち人間を救ってくださるのは、神様の御業です。しかし、聖書のみことばは、それと同時に、救いに関して、私たちの選択であり…、それゆえに、私たちの責任でもあると教えてくれています。だから、イエス様を始め、多くの弟子たちもまた、聖書の至るところで、「悔い改めなさい！ イエス・キリストを信じなさい！」ということをお命令形で、私たちに訴えかけるわけです。

例えば、イエス様の弟子であったイスカリオテ…、彼は、他の12弟子たちと同様、イエス様のメッセージを人一倍聞いて、イエス様の起こされた奇蹟なども、たくさん目撃していたはずですよ…。…にも関わらず、彼は、最後の最後まで、自分の罪を正しく悔い改めて…、イエス様を信じる、ということをしませんでした。だから、イエス様も、イスカリオテに対して、『生まれなかつたほうがよかつた…』(マタイ 26:24)とまでおっしゃられたのです。このことは、イスカリオテが救われることなく、永遠の裁きへ下っていった、ということをおっしゃっています。これは、イスカリオテが下した選択の結果ですよ…。

このように、「聖霊を汚す」とは、神様からたくさんの知識が与えられていながら…、しかも、そういったことについて、ある程度、気がついていながら、それでもなお、神様を拒む(=神様を信じようとしない)というような罪を言うのではないでしょか？…と言いますのは、私たちが救われるための唯一の道は、イエス様を信じる(=信仰)だけであって、こういった者たちは、その信仰を拒んだがゆえに救われぬのです。イエス様は、あのイスカリオテに対して、最後の最後まで愛を示して…、イスカリオテが悔い改めるように勧め、また、導いてくださいました。…しかし、それでもなお、イスカリオテは、イエス様を信じなかつたのです。そういったことが、「聖霊を汚す」というような罪ではないでしょか？

どうぞ、皆さん、もしできましたら、ヘブル 6 章を開けてみてくださいませ。その 4 節以降で、みことばは、このような警告を与えてくれています。『4 一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、5 神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、6 しかも墮落してしまふならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。7 土地は、その上にしばしば降る雨を吸い込んで、これを耕す人たちのために有用な作物を生じるなら、神の祝福にあずかります。8 しかし、いばらやあざみなどを生えさせるなら、無用なものであって、やがてのろいを受け、ついには焼かれてしまいます。』(ヘブル 6:4-8)

⇒実は、このみことばもまた、聖書の中で最も解釈が難しいとされているところの1つです。ここでも、先程と同じような…、救いに関することが教えられてあります。このみことばも、一見、1度救われてから、墮落してしまうと、救いを失ってしまって…、もう2度と、その救いを取り戻すことはできない、というようなことが教えられてあるように“見えるかも”知れませんが、しかし、間違いのないことは、例えば、ヨハネ 10 章には、『28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。』ということがはっきりと教えられてあって、1度、救われた者は、もう2度と、その救いを失うことが無い！ということです。

ですから、ここへブル書 6 章で教えられてあることは、①一見、救われたように見えても、実は、その人は救われていなくて…、そのために、教会や神様から離れて(=墮落して)しまうなら、そういった者は、もう2度と立ち返ってこないという教えなのか、あるいは、②もしも、仮に、救われたはずの者が、神様に背いて、その神様から離れてしまうなら、もう、2度と神様の恵みに預かれないですよ！ということクリスチャンたちに教えるための「戒め」…、つまり、実際には起こり得ないことを、「決して、そのようなことをしてはならない！」ということとを、警告するための教えであると考えられる解釈などがあります。…正直、私も、自信のあることは言えません。しかし、間違いのないことは、聖書のみことばは、別のところで、はっきりと、1度、間違いなく、救われた者たちは、もう2度と、その救いを失うことが無い！如何なる者であっても、私たち救われた者を、神様から引き離すことはできない！ということ、ローマ書 8 章の最後のみことばが教えてくれている、ということです。

ただ、私たちは人間です…。私たちは、誰が、本当の意味で(=間違いなく)、救われているかどうかを知る術がありません。ですから、私たち人間の目には、1度救われたはずの者たちが、その後、信仰を失ってしまって…、教会から離れていってしまう、というようなことが起こったかのように“見えてしまう”ことがあります。例えば、過去、私は、かつて、牧師だった人物が信仰を棄ててしまったり、あるいは、執事を長年務めていた人物が信仰を棄ててしまって、神様からも、教会からも離れてしまった…、なんていうことを知っています。皆さんだって、そういった経験をお持ちでしょう？

そのように、残念ながら、私たち人間には、ほとんど確実なことが分からないがゆえに、1度、救われたはずの者が、さも、その救いを失ってしまったかのように見えてしまうことがあります。でも、実は、彼らは、本当は、救われていなかっただけなのです。I ヨハネ 2:19 で、使徒ヨハネは、ある者たちが教会から去っていったことに関して、こう教えてくれています。『彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であつたのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかになるためなのです。』⇒このように、本当に救われていなかった者たちは、正しい教会や神様から離れていってしまうことが十分にあり得ます。まさに、彼らは、私たちが前回に学んだような、岩地やいばらの中という土地のような存在であつたのだらうと思われれます。

Ⅲ・神の 主権 ! (26-34 節)

今日のみことばが、最後3つ目に教えてくれているのは、すべてを御支配なさっておられる、神様の“主権”というものです。どうぞ、今日のみことばに戻っていただきまして、その 26-34 節をご覧ください。そこで、イエス様は、このように教えてくださっています。

26 また言われた。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、

27 夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知り

ません。

28 地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実が入ります。

29 実が熟すると、人はすぐにかまを入れます。収穫の時が来たからです。」

30 また言われた。「神の国は、どのようなものと言えよ。何にとえたらよいでしょう。

31 それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときには、地に蒔かれる種の中で、一番小さいのですが、

32 それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」

33 イエスは、このように多くのたとえで、彼らの聞く力に応じて、みことばを話された。

34 たとえによらないで話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた。

●人を救い、人を成長させるのは、神の御業である！

ここで、イエス様は、何を教えてくださっているのでしょうか？…ここで、イエス様は、『神の国』に関して、2つの例えを使って教えてくださっています。ここで言われている『神の国』とは、簡単に言うと、救いのことです。今日は、もう時間の関係もあって詳しく学ぶことができませんけれども、例えば、マルコ伝 10 章やヨハネ伝 3 章などを見てくださったなら、「神の国」が、「救い」や「永遠のいのち」と同じ意味であるように使われています。

1つ目の例え、ここでは、私たちが種を蒔くと、私たちが寝ていても…、あるいは、放っておいても、勝手に、植物の芽が出て、生長していくという話です。どうぞ、28 節に注目してください。そこで、イエス様は、『人手によらず…』と教えてくださったように、確かに、植物は、私たち人間が生長させているのではありません。私たちは、植物が育ちやすいような環境を作っているだけで、実際に、植物は、私たち人間が育てているのではなく、実は、天の神様が、すべてをなしてくださっているのです。そうでしょ？…だから、私たちがどれほど、一生懸命に何かを育てようとしても、一瞬にして、それが崩れ去ってしまうことだってあり得ます。…と言うのは、それが、神様のみことばではなかった場合などです。

それと、もう1つの例え、それは、『からし種』のような、1mm にもならないような、ちっぽけな種であっても、それが大きくなると、数メートルほどの高さになるほど、大きく生長していきます。そのように、神様が、私たち人間のことを救い…、成長させていくてくださるのです。そのような、神の業は、歴史もまた証明してくれています。今、世界中で、イエス・キリストという救い主の名前が知られています。それこそ、世界の至るところで、イエス・キリストの像やキリスト教の教会を目にすることができます。その始まりは、イスラエルという小さな種から始まっていったのです。これもまた、私たち人間の力ではなく、神様の御業です…。そうじゃないでしょうか？

<励ましの言葉>

このように、真の神様がなしてくださる御業は、私たち人間の努力や思惑などとは、必ずしも一致しません。しかし、じゃあ、だからと言って、聖書のみことばは、私たち人間の努力や選択、あるいは、責任などをすべて否定しているかと言うと、そうでもありません。そこには、私たち人間の頭では理解できない内容や項目があるのです。

しかし、はっきりと分かっていることは、私たちには、選択があり…、それゆえに、責任もあるということです。今日のみことばの平行記事である、ルカ 8 章で、イエス様は、こう教えてくださっています、『18 だから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っていると思っ

ているものまでも取り上げられるからです。』

⇒このみことばは、私たちのみことばを聞く、その聞き方が大事だということを教えてくれています。…ひょっとして、皆さんは、みことばを“聞いてさえいれば良い”とか、教会に通ってさえいえば良い。というような思い違いをしておられないでしょうか？イエス様は、みことばを聞く、『聞き方に注意しなさい！』ということをお教え…、また、警告をしてくださったのです！

また、旧約聖書の 1サムエル記 15:22 でも、『…主は【主】の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。』というみことばがあります。…果たして、皆さんのみことばに対する姿勢は、天の神様が喜んでくださるような…、真剣なものでしょうか？

前回と今回に学んだみことばから…、そして、私の経験からも言えることは、神様のみことばというものは、しっかりと、神様のみことばを学ぼう！と頑張っ…、そのための労を惜しまなかった者たちに対して、示されるものであって、決して、長い間、教会に通っているから…とか、私は、頭が良いからとか、あるいは、私はたくさんのお金をしてきたから、と言って示されるものではありません。神様のみことばを知るためには、ますます、私たちが神様の前に謙虚になって、真剣に、神様のみことばを聞こう！学ぼう！みことばを実践したい！と思いで、みことばを聞き続ける以外に…、学び続ける以外にありません。だから、イエス様も、『聞く耳のある者は聞きなさい！』ということをお叫ばれて、民衆たちに教えてくださったわけです。

さて…、今日、このみことばを聞いた私たちの問題は、私たちが、神様のみことばを真剣に聞こうとするかどうかです。もちろん、環境は一人ひとり違います。だから、簡単に、自分と他人を比べることはできません。でも、天の神様は、すべてを御存じです！…どうか、その神様の前に、責められることがないように、真剣に、みことばの種を追い求めて、神様に喜ばれるような歩みを、皆さんがなしていかけてくださることを期待いたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。